論考

菅江真澄が描いた「縄文土器」と「土偶」

関根　達人

一、はじめに

今日、考古学の世界でも菅江真澄の評価は総じて高い。菅江真澄の考古学的業績を初めて評価したのは、パリでフランス先史学を学び、日本の先史文化研究に大きく寄与した中谷治宇二郎であった。中谷は、我が国の先史学の歩みを振り返るなかで、土器の発見史に関して真澄の著作に触れた（中谷一九三五）。中谷は、『栖家能山』・『追柯呂能通度』・『新古祝甕品類之図』を挙げ、それらを通して、真澄が、①今日「縄文土器」とよぶものを祝部と同類の古代遺物と認識していた、②それらを様式上、亀ケ岡遺跡から出土する土器と同類のもの（「亀ケ岡式土器」）と、美加幣乃與呂比（甕甲）とに分別していた、③亀ケ岡遺跡から出土する土器と同類のもの（「亀ケ岡式土器」）については、同様のものが蝦夷国の禰母呂（北海道根室市）からも掘り出されることを根拠として蝦夷の製作した遺品との判断に到っていると指摘し、年代を理解した上で使用民族の仮説まで提示した点を高く評価した。清野謙次は真澄を江戸時代に於ける最多数の縄文土器発見者と評価する一方、真澄が「縄文土器」を蝦夷の作った祝部土器と考えていたと指摘した（清野一九五四）。②の点に関しては、内田武志も「こんにち、縄文土器と称されるこれら出土の土器の型式に、真澄は自己の観察でそれを寒苗・花牧型のものと、亀ケ岡型のものとに判然と分類しているのは卓見と言わなければならない」と述べ、中谷と同様の評価を下している（内田・宮本編一九七三b）。

今日の考古学上の菅江真澄の評価は、元を辿れば、戦前に行われた中谷の先史学研究にたどり着くわけだが、戦後の日本考古学・古代史研究の進展に照らし合わせてみた場合、そうした評価は変わらないのであろうか。そもそも真

図２　青森市三内出土の土偶
『栖家能山』より　秋田県立博物館蔵

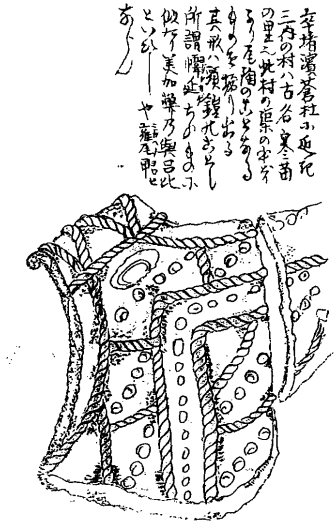

図１　青森市三内出土の土器
『栖家能山』より　秋田県立博物館蔵

澄の時代には「縄文土器」や「土偶」といった概念は存在せず、真澄の描いた「縄文土器・土偶」をはじめからそうした枠の中で解釈しようとすることにも問題がある。

約二〇〇年ほど前に真澄が取り上げた亀ケ岡遺跡や三内丸山遺跡は、縄文文化を代表する遺跡として今や全国にその名が知られ、地元ではそれらを核に、北日本の縄文遺跡を世界遺産に登録しようとの動きも出始めた。

本稿では、真澄が描いた「縄文土器」と「土偶」を取り上げ、それらの資料評価を行うとともに、真澄の歴史認識について考える。

二、栖家能山に描かれた「縄文土器」と「土偶」

今日残されている真澄の著作の中で、縄文土器や土偶を描いたものとしては、寛政八（一七九六）年四月一四日、現在の青森市三内を訪れた際、渠のほとりから出土したものの記録が載せられた『栖家能山』が最も古い。

三内の出土品に関する絵は三葉ある（図1～3）。

図1に描かれているのは、その型式学的特徴からみて、縄文時代中期の円筒上層ｃ式土器の口縁部破片と考えられる。台形状突起とその下にあけられた孔、口縁部を巡る粘土紐の貼り付けとその間に充填された円形の刺突など、そ

の特徴を良く捉えている。真澄は三内からは「瓦陶のごとなるもの」が掘り出されるとし、「其形は頸鎧のごとし、所謂幃延ちふものに似たり、美加幣乃與呂比といひしや、甕甲（ミカベノヨロヒ）ならん」と記しており、それが「器」であるとは一言も述べていない。

図2に描かれているのは、土偶の頭部と体部の破片である。このうち体部破片のほうは、円筒上層式土器に伴なう「板状」あるいは「十字形」土偶と呼ばれるもので、縄文原体押圧による直線文・波状文・渦巻状文が認められる。頭部破片のほうはかなりデフォルメされているようで、一見したところ円筒土器に伴う土偶には見えない。顔の表現は比較的写実性に富む。額の中央には円形の小さな突起らしきものが描かれているが、そのような土偶は類例を知らない。円筒上層c・d式期には比較的写実的な顔をもつ土偶が存在するものの、それらとは大分様相が異なり、まるで和人が描くところの蝦夷の顔のようである。

図3は板状（十字形）土偶の体部破片の可能性があるが、よく分からない。

真澄はこれらの土偶に対して、埴輪起源説話として有名な日本書紀垂仁天皇三二年七月の皇后・日葉酢媛命の陵墓の条に登場する野見宿禰伝説を引用し、「多氏母乃」＝「埴輪」という言葉を用いた。『栖家能山』では、三内から出土した土偶の頭に「波邇王（はにわ）」との表記がなされている点が注目される。

残念ながら、『栖家能山』の原本は所在不明で、秋田県立図書館所蔵の写本が知られるだけである。従ってこの写本にある絵がどのくらい忠実に真澄の観察した土器・土偶を表現しているかは判らない。しかし、円筒土器に比べれば土偶頭部の表現がリアルさを欠いている点は確かであり、それは真澄の手になる原本の段階からそうであった可能性が高い。真澄の描く土偶には、それに対する真澄自身の歴史認識が加味されているのではなかろうか。

三、外浜奇勝に描かれた「縄文土器」

『外浜奇勝』には、寛政八（一七九六）年七月二日から翌三日にかけ訪れた、現在のつがる市館岡にある亀ケ岡遺跡から出土する土器に関する記述と土器二点を描いた絵（図4）が収められている。真澄は亀ケ岡から「瓶子、小甕、小壺、天の手抉（タクジリ）、祝瓶（イワヒベ）やうの、いにしへの陶のかたしたるうつは」が出土するとし、宿泊した館岡の家では亀ケ岡から掘り出したと思われる「缶（ほとき）の形したる小瓶」を唾壺として用いていると記した。

図4　亀ケ岡遺跡出土土器
『外浜奇勝』より　『菅江真澄全集』第3巻（未来社）より引用

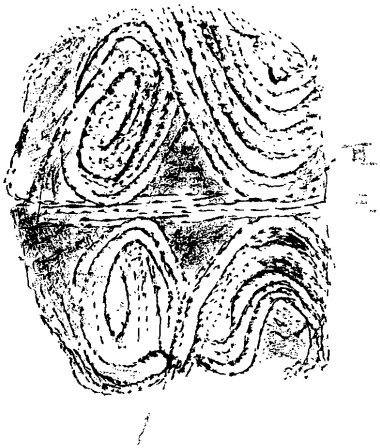

図3　青森市三内出土の土偶？
『栖家能山』　秋田県立博物館蔵

図4には縦に条が走る縄文が施文された壺形土器（左）と、斜めに条が走る縄文を有し、口縁の一部が欠けた小型の鉢形土器（右）が描かれている。前者は縄文時代晩期後半、大洞C2式～A式に比定できよう。このように縦に条が走る縄文は、縄文時代晩期後半の東北北部から北海道南部の土器に特徴的にみられる。後者は、記述にある「缶（ほとき）の形したる小瓶」と思われ、晩期の縄文土器と考えられるが判然としない。重要なことは、真澄が亀ケ岡から出土する土器を「いにしへの陶のかたしたる器」と認識していた点である。

四、追柯呂能通度に描かれた「縄文土器」

『追柯呂能通度』には、現在の黒石市花巻から出土した縄文土器の絵が三葉収められている（図5～7）。真澄が花巻の縄文土器を描いた年月日は不明だが、記述の中に寒苗（三内）や甕が岡（亀ケ岡）が出てくることから、亀ケ岡を訪れた寛政八（一七九六）年七月二日から津軽を去った享和元（一八〇一）年一一月までの間と考えられる。

図5には円筒土器の口縁部破片が二点描かれている。このうち右上のものは、突起の形状や粘土紐が貼付されている点で、前述の三内出土の円筒土器に類似するが、円形の

刺突を欠いている点でそれとは相違する。判然としないが、粘土紐の間には地文の縄文らしきものが表現されているようにもみえる。もしそうだとすれば円筒上層d式であろうか。左下のものは口縁部に太い隆起線を巡らし、隆起線の上には幾筋もの刻みが加えられている。刻みはおそらく縄文原体による押圧であろう。円筒上層a式と思われる。

図6にある壺形土器は、頸部の裾が開き、肩が強く張り、小さな底部に直線的に続く。口縁部には山形突起と数個の小突起が配置されている。体部には縦に条が走る縄文が施文される。このような特徴をもつ土器は、東北北部から北海道南部の大洞C2式に比定できる。

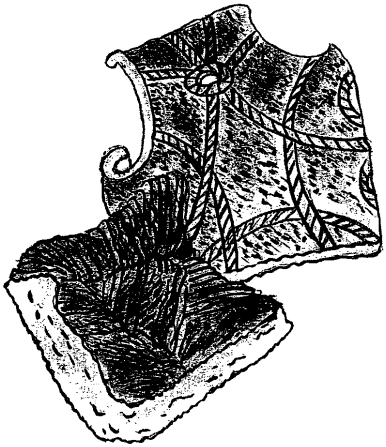

図5　黒石市花巻出土土器1
『追柯呂能通度』より　秋田県立博物館蔵(写本)

図7には5点の壺形土器が描かれているが、図5・6に比べ写実性に欠ける。左上の壺は肩部に雷文のような文様帯が巡る。『新古祝甕品類之図』にある亀ケ岡出土土器(図9)に良く似ているが、それよりも表現が拙い。雷文のように見えるものは工字文を描いた可能性が高いが、それにしては文様帯の位置がやや下過ぎる。縄文土器だとすれば晩期後半、大洞A式であろう。右上の壺は無文、左下の壺は地文に縄文が使われている可能性があるが、判然としない。右下の壺は、長胴で下膨れとなり、体部には入組文らしき文様が認められる。晩期前葉の大洞BC式であろうか。中央の壺は体部が扁平につぶれており、赤彩されているようである。縄文土器だとすれば、器形からみて、晩期前半と思われる。

真澄が描いた花巻の出土品は、縄文時代中期の円筒土器文化期のものと、晩期の亀ケ岡文化期のものの両者が含まれている。花巻遺跡は、佐藤蔀らが東京人類学会雑誌に寄せた資料紹介などを通して、明治時代には既に全国的に知られた遺跡となった。また、菅江真澄の考古学的業績を初めて世に紹介した中谷治宇二郎により昭和三(一九二八)

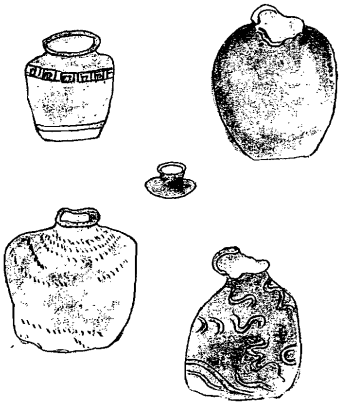

図7　黒石市花巻出土土器3
『追柯呂能通度』より　秋田県立博物館蔵(写本)

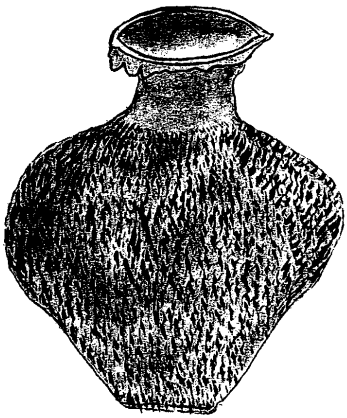

図6　黒石市花巻出土土器2
『追柯呂能通度』より　秋田県立博物館蔵(写本)

年七月二九・三〇日に発掘調査が行われ、組石墓や円筒上層式土器（中谷はこれを「花巻式」と命名）が出土している（福田二〇〇二）。また昭和六〇（一九八五）年には、地元黒石市教育委員会が発掘調査を行い、後期初頭の組石墓・土壙墓・埋甕などが検出され、前期から後期初頭の縄文土器（主体は中期末から後期初頭）と少量の弥生土器が発見された（黒石市教育委員会一九八六）。いずれの調査でも花巻遺跡からは晩期の土器は発見されていない。近隣の晩期の遺跡としては、花巻遺跡から北東に約一キロほど離れた石名坂遺跡が著名である。

五、美香幣の誉路臂に描かれた「土偶」

『美香幣の誉路臂』には、文化二（一八〇五）年八月一二日、現在の北秋田市阿仁戸鳥内から出土し、真澄が「美香幣の誉路臂」として認識したもの3点を一枚の絵にを描いたものが収められている（図8）。このなかで唯一土偶の可能性があるのは右上の頭部破片のみで、残る2点に関しては、土偶の可能性がない。左側のものは土製品だとすれば、欠損した縄文時代晩期の耳飾の可能性が考えられなくもないが、文様に無理があり、断定はできない。右下のものについては、東北北部から出土する考古資料の中に該

当するような遺物は見当たらない。土偶の可能性のある右上の資料についても、『栖家能山』にある三内出土の土偶頭部ほどではないが、写実性にかけるため、年代については特定しがたい。

真澄は、絵の説明として三内の土偶に対して引用した野見宿禰の埴輪起源説話を、より詳細に付け加え、「波邇王（はにわ）」、「多底母能」、「頸鎧」、「真栖案に甕部ちふよしにや」と書き添えている。写実性の問題ならともかく、何故、実際には存在しないような器物を戸鳥内出土の「美香幣の誉路臂」として真澄は描いたのであろうか。

六、新古祝甕品類之図に描かれた「縄文土器」

『新古祝甕品類之図』には、縄文土器を描いたとおもわれるものが8点ある（図9～16）。

図9は、亀ケ岡遺跡出土の壺形土器。肩部に工字文とおぼしき文様が巡る。体部は無文であろうか。大洞A式に比定されよう。真澄は「俚民、こは高麗人の来て制作たるといふ、蝦夷洲より掘りえる陶に凡似たり」と説明。

図10は、現在の岩手県一戸町内出土の注口土器で、南部盛岡藩領鹿角毛馬内給人山本榮蔵宗秀家蔵。注口部や頸部の作りは比較的写実的で、その特徴から大洞C1式に比定できる。真澄は「こはもろこしの觶觚たぐひにして、出羽の秋田比内なる櫻殿といふ柵戸の蹟より掘り出しものと、さまおなし、これも蝦夷人の作りなしたる陶にや」と述べた。桜殿出土の土器（図13）については後述する。

図11は、大館市橋桁遺跡出土の壺形土器。橋桁遺跡は縄文時代晩期の遺跡として秋田県の遺跡台帳に登録されている。頸部は短くやや外反気味で無文。体部は長胴で、縄文が施されている。型式の特定は困難だが、縄文時代晩期の土器とみて間違いなかろう。真澄は、橋桁村の家の後では、亀ケ岡遺跡と同じように多数の土器が出土すると述べた上で、出土品に関し、「そのさま蝦夷國の禰母呂より掘り得とて、人のもて来りしに形おなじ、これもいにしへ蝦夷の作りし陶にやあらむかし」との認識を示した。

図12は、現在の大館市十二所別所沢出土の壺形土器。真澄は享和二（一八〇二）年一二月から翌年の三月まで十二所に滞在している。土器は口縁部が平坦に張り出し、頸部は無文で、体部には縄文が施文されている。底部は角がやや膨らみを持って張り出すように描かれており、底部に低い四脚が付く可能性もある。大洞C2式～A式の特徴を有する。真澄は、「そのさま秋田比内の橋桁村、蝦夷國の禰母呂ノ浦に掘るものに凡似たり（中略）此甕はいにしへ蝦

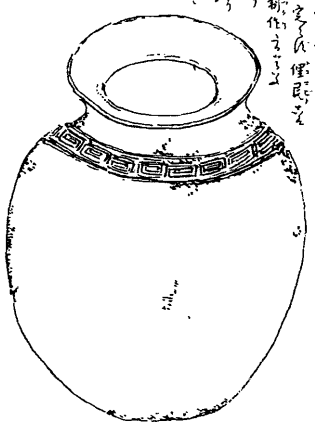

図9　亀ケ岡遺跡出土土器
『新古祝甕品類之図』より　大館市立中央図書館蔵

図8　北秋田市阿仁戸鳥内出土品
『美香幣の誉路臂』より　秋田県立博物館蔵（写本）

夷など、此處に住て作たるにや、祢母呂の甕をもておしはかり知るべし」との解説を加えた。

図13は、現在の大館市中山字桜殿にある桜殿遺跡出土の注口土器。桜殿遺跡は縄文時代中期から後期の遺跡として遺跡台帳に登録されている。所蔵者とされる十二所谷地町の大森永吉は、十二所代官茂木氏配下の給人である（大館市史編さん委員会編一九七八）。注口部は斜め上方に向かって長くのびる。体部はややつぶれた球形で、最大径部に三箇所突起が付く以外装飾を持たない。底部には小さな窪みが描かれているが、これは縄文時代後期後半の「瘤付土器」の注口土器にしばしばみられる特徴である。瘤付土器のなかでは中程の段階、後期後葉に比定できよう。

図14は、大館市山田出土の注口土器で、高さ約二寸、胴周り約九寸とされる。所蔵者は十二所給人の大森永吉。口頸部が内傾し、肩が張る。真澄の絵では、口頸部と肩の部分に波状の文様が表現されているが、おそらくは羊歯状文の一種であろう。晩期前葉大洞BC式と考えられる。

図15は、現在の大館市山田字柏木の狐森遺跡出土の深鉢形土器。狐森遺跡は縄文晩期の遺跡として知られ、『大館市史』第一巻にも、同遺跡から出土した晩期の土器が五点程掲載されている。真澄が描いた土器は、短い口頸部が直

立気味に立ち上がり、肩部が張る深鉢である。口縁部には所々B突起が付き、頸部文様帯には羊歯状文が展開する。体部は縄文が施されている。型式学的特徴から、大洞BC式でも新しい段階の土器とみられる。

図16は、現在の大館市比内町独鈷から文政元（一八一八）年に出土した無頸壺（注口土器）である。遺跡台帳に登録された遺跡名では数珠掛遺跡に相当すると考えられる。口縁部には何カ所か小さな突起が付き、体部には三段に渡って文様帯が重畳する。一見したところ縄文土器の文様としては奇異な印象を受けるが、磨り消し縄文を伴う玉抱き三叉文あるいは魚眼状三叉文と理解できなくもない。晩期初頭の大洞B1式にはこのような文様を有する無頸壺（注口土器）がしばしばみられる。独鈷（数珠掛遺跡）は縄文晩期の遺跡として知られ、『大館市史』第一巻にも、同遺跡から出土した後期末から晩期前葉の土器が六点程掲載されており、真澄の描いたこの土器も大洞B1式とみてよかろう。

以上、新古祝甕品類之図で真澄が描いた縄文土器は後期のもの一点と晩期のもの七点であり、所謂亀ケ岡式土器を主体とする。真澄が「美加幣乃與呂比」と呼んだ円筒土器が新古祝甕品類之図には一点も挙げられていない点は注目しなければならない。このことは、少なくとも円筒土器は、真澄にとって「祝甕」ではなかったことを物語っている。この点については次項で検討する。

七、菅江真澄と「縄文土器」・「土偶」

縄文土器を描いたものとして今日知られるものの中では、本稿で取り上げた菅江真澄の絵と、天明八（一七八八）年から翌寛政元年頃、弘前藩士比良野貞彦が故郷津軽の民衆生活を記録した『奥民図彙』（青森県立図書館一九七三）にある亀ケ岡遺跡出土土器の絵が最も古い。比良野は亀ケ岡出土の壺、鉢、注口の3点を1枚の絵に描いたが、その出来映えは、写実性の点で真澄の絵に遙かに劣る（図17）。『奥民図彙』に収められた他の絵は概して写実性に富み、それ故今日でも学術的価値が高いのだが、何故か縄文土器だけは極めてラフなスケッチなのである。真澄と比良野では、土器に対する関心度が大きく違っていたとしか考えられない。

真澄が描いた縄文土器は、大きく中期の円筒土器と晩期の亀ケ岡式土器に分けられる。

このうち真澄が「祝甕」と認識していたのは亀ケ岡式土器のみで、円筒土器に関しては、真澄の記述を見る限り、「瓦陶」との表現があるだけで、「祝甕」としてはおろか、

図11　秋田県大館市橋桁出土土器
『新古祝甕品類之図』より　大館市立中央図書館蔵

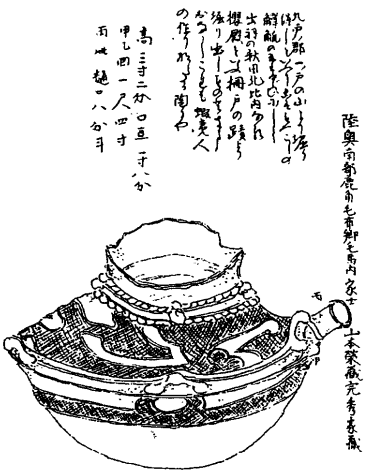

図10　岩手県一戸町内出土土器
『新古祝甕品類之図』より　大館市立中央図書館蔵

図13　秋田県大館市中山桜殿出土土器
『新古祝甕品類之図』より　大館市立中央図書館蔵

図12　秋田県大館市十二所別所出土土器
『新古祝甕品類之図』より　大館市立中央図書館蔵

そもそも「器」と見ていたかどうかも定かでない。文字通り、「美加幣乃與呂比」＝「甕甲」と認識していた可能性が高いのである。各地を旅した真澄ゆえ、どこかで古墳の墳丘を囲む円筒埴輪を実見していた可能性は高い。その目には三内や花巻の円筒土器は、全体的なプロポーションが円筒埴輪に類似するのみならず、突起下の円孔も円筒埴輪の円窓に重ね合わせて見えたのではなかろうか。中谷治宇二郎は、真澄が、今日「縄文土器」とよぶものを祝部と同類の古代遺物と認識し、それらを様式上、亀ケ岡遺跡から出土する土器と同類のもの（「亀ケ岡式土器」）と、美加幣乃與呂比（甕甲）とに分別していたとして評価した。しかし以上述べたように、真澄は円筒土器に関しては、土器すなわち「器」として認識していなかった可能性が高く、亀ケ岡式土器と円筒土器との差異を土器様式の差として認識していたとの評価は当たらない。真澄が意識した両者の差異は、あくまで「祝甕」と「甕甲」との差なのである。

真澄は、亀ケ岡式土器に関しては、器種の違いをこえて土器様式としての共通性を認識し、「いにしへ蝦夷」の残したものと考えていた。その根拠となったのは、「蝦夷國の禰母呂（ねもろ）より掘り得とて、人のもて来りし」土器であった。寛政元（一七八九）年クナシリ・メナシのアイヌ蜂起とそれに続く幕府による蝦夷地直轄地化など、真澄が生きた時代、根室周辺には急速な和人の進出あった。管見によれば、根室周辺で亀ケ岡系土器が出土する遺跡としては、根室市琴平町1丁目の金刀比羅神社境内に位置するベニケムイ遺跡が知られるに過ぎない。ベニケムイ遺跡からは、尖底押型文土器や平底で撚糸文を施した東釧路Ⅲ式などの早期の土器とともに、連繋入組文を有する亀ケ岡系の壺型土器が出土している（北構一九七六）。また、河野広道ノートにも、ベニケムイ遺跡で採集された、大洞C2式ないしA式に比定可能な壺形土器が報告されている（宇田川編一九八一）。ベニケムイ遺跡のある根室市金刀比羅神社は、高田屋嘉兵衛が、文化三（一八〇六）年に根室の漁場開拓に際して、海上安全と漁業振興を祈願して建立したと伝えられ、境内には、天保や安政といった江戸期の年号を記した石造物も存在する。文化年間といえば、真澄が生きた時代であり、まさに彼が新古祝甕に関心を寄せていた時期にあたる。もちろん断定はできないものの、真澄が目にした「蝦夷國の禰母呂（ねもろ）より掘り得とて、人のもて来りし」土器は、根室の金刀比羅神社境内遺跡（ベニケムイ遺跡）の出土品であった可能性がある。和人の進出により漁場開拓に沸く根室。その地に新たにに作られた神社の境内から出土する珍奇な

図15　秋田県大館市山田柏木出土土器
『新古祝甕品類之図』より　大館市立中央図書館蔵

図14　秋田県大館市山田出土土器
『新古祝甕品類之図』より　大館市立中央図書館蔵

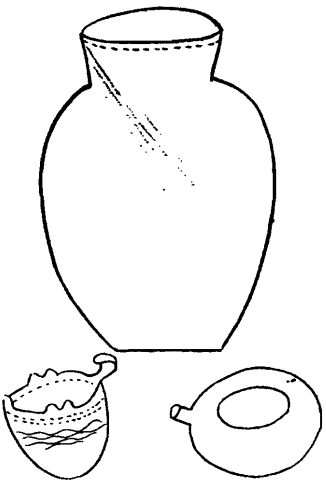

図17　天明8（1788）年から寛政元（1789）年頃、弘前藩士比良野貞彦が描いた亀ケ岡遺跡出土土器
『奥民図彙』（青森県立図書館郷土双書五）より引用

図16　秋田県大館市比内町独鈷出土土器
『新古祝甕品類之図』より　大館市立中央図書館蔵

ものが、蝦夷地の物産として本州にもたらされる。時代状況を考えれば、いかにもありそうな話ではないだろうか。現在では、おなじ道東、釧路市緑ガ岡遺跡でも、地元のヌサマイ式土器に混じって大洞A式に類似する亀ケ岡式系土器が発見されている（野村一九八五）。大洞A式に比定できる亀ケ岡式系土器はさらに遠く道北稚内市大岬オニキリベツ遺跡にも及んでいる。真澄は、宇鉄のような津軽外ケ浜に暮らす本州アイヌを通じて、また、亀ケ岡式土器の分布を通して、アイヌの先祖である「いにしへ蝦夷」が東北北部に居住していたとの認識を深めたのであろう。

菅江真澄の土偶観に関しては、既に藤沼邦彦が、土器と同じように蝦夷が作ったものと考えていたとの見解を述べている（藤沼一九九七）。真澄は、三内（栖家能山）と戸鳥内（美香幣の誉路臂）の土偶を描いているが、前者は円筒土器にともなう土偶である。真澄はこれらの土偶に対して、埴輪起源説話である野見宿禰伝説を引用し、「波邇王（はにわ）」と表記した。真澄が円筒土器を円筒埴輪の一種と見立てていたのではないかと推察したが、だとすれば、円筒土器と一緒に出土する土偶を人物埴輪と理解したとしても不思議はない。しかし、真澄の描く土偶のうち、頭部に関しては、実際の土偶とかけ離れている。円筒土器や土偶の体部を正確に描写しておきながら、一方で土偶の顔をあたかも「アイヌ絵」に登場するアイヌのようにデフォルメしているのである。真澄は土偶を「いにしへ蝦夷」が遺した「波邇王（はにわ）」と理解したからこそ、このような表現法をとったのであろう。真澄といえどもこの点に関しては、自らの先入観の壁を超えられなかったのではなかろうか。

真澄は亀ケ岡式土器を「いにしへ蝦夷」に結びつけて考えたわけだが、当時こうした見方が一般的でなかったことは、新古祝甕品類之図において亀ケ岡遺跡出土の壺形土器に関する「俚民、こは高麗人の来て制作たるといふ」との説明から窺い知ることができる。地元民が亀ケ岡式土器を高麗人に結びつけたのは、ひとえにその精巧な作り故であろう。当時アイヌの人たちが置かれていた過酷な状況に鑑みて、一般の人々には、精巧な亀ケ岡式土器を「いにしへ蝦夷」に結びつけるという発想自体難しかったに違いない。そうした「常識」に囚われない発想をなし得たことにこそ、菅江真澄の真骨頂があるように思える。

引用文献

青森県立図書館　一九七三　『奥民図彙』　青森県立図書館郷土双書五

秋田叢書刊行会　一九三三　『秋田叢書別集　菅江真澄集』第六
内田武志　一九五四　『菅江真澄未刊文献集』　二　常民文化研究第六七
内田武志・宮本常一　一九七二　『菅江真澄全集』第三巻　未来社
内田武志・宮本常一　一九七三a　『菅江真澄全集』第四巻　未来社
内田武志・宮本常一　一九七三b　『菅江真澄全集』第九巻　未来社
内田ハチ編　一九八九　『菅江真澄民俗図絵』　中巻　岩崎美術社
宇田川洋編　一九八一　『河野広道ノート』考　古篇1　北海道出版企画センター
大館市史編さん委員会　一九七八　『大館市史』　第二巻
大館市史編さん委員会　一九七九　『大館市史』　第一巻
北構保男　一九七六　「金刀比羅丘のむかし」『金刀比羅神社御創祀百七十年記念誌』
清野謙次　一九五四　『日本考古学・人類学史』　上巻　岩波書店
黒石市教育委員会　一九八六　『花巻遺跡』　黒石市埋蔵文化財調査報告書4
中谷治宇二郎　一九三五　『日本先史学序史』　岩波書店
野村崇　一九八五　『北海道縄文時代終末期の研究』　みやま書房
福田友之　二〇〇二　「中谷治宇二郎の津軽」『海と考古学とロマン』三六九～三八二頁
藤沼邦彦　一九九七　『縄文の土偶』歴史発掘　3　講談社

関根達人（せきねたつひと）
一九六五年生まれ。弘前大学人文学部助教授。専門は日本考古学。著書・論文に『日本海域歴史大系』第四巻（共著、清文堂、二〇〇五年）、「アイヌ墓の副葬品」（『物質文化』七六号、二〇〇三年）など。